

■末吉麦門冬(安恭) “知の巨人”南方熊楠も驚く才能で、{沖縄タイムス}主筆となり、琉球王国文化の保全に努めたが、早世。
 すえよしばくもんとう
 帝国大学始・1886＝ 明治維新後の琉球処分で琉球王国崩壊後7年目に、沖縄県の首里儀保で、代々王府の中樞を担ってきた名門上層士族の長男に生まれる。姉が一人おり、
 国民之友始・1887＝ 1歳：弟安持が誕生、以後、多くの弟妹が誕生。
 帝国憲法発布1889＝ 3歳：多くの蔵書をもって読書にあけくれ、王国の歴史や文学に詳しく、芸能や美術にも精通する父のもと、その知性と教養を身につけて育つ。
 沖縄県師範小学校に学び、
 日清戦争始・1894＝ 8歳：
 日清戦争終・1895＝ 9歳：

ピアノ国産化・1900＝14歳：のちに新潮社を創立する佐藤義亮が創刊してまもない{新聲}を東京から取り寄せ、誌上の論客田岡嶺雲の熱烈なファンになって、友人たちと文学談義をする早熟ぶり、
 教科書疑獄・1902＝16歳：上京して、国粹主義的思想家で優れた教育者だった杉浦重剛が校長を務める日本中学校に入学するが、あまり通わず、英語塾に通ったり、図書館で過ごしたり、古書店をのぞくなどしている。
 日露戦争始・1904＝18歳：弟安久が誕生。弟安持も上京してきて、飯田橋の下宿に同居。日露戦争勃発にも徴兵されず、
 日露戦争終・1905＝19歳：日比谷焼打ち事件などの騒乱をよそに、亡くなってまもない正岡子規の作品に影響を受けて、句作するようになり、一時帰郷して名家名護家の娘真松と結婚するも、新妻を置いて東京に戻るも、当時の男性には珍しいほどストレートに愛を語る手紙を送っている。
 満鉄発足・・・1906＝20歳：安持が与謝野鉄幹・晶子夫妻の{新社社}の同人になって{明星}に作品を発表するのに呼応するように、沖縄の新聞に寄稿し始め、兄弟励まし合いながら創作しようとしていた矢先、長男誕生で帰郷中に、
 韓国反日暴動1907＝21歳：安持が、下宿でうたた寝中のランプ転倒による火災による全身火傷で死去。以後、そのまま沖縄に定着、
 アラビヤ創刊・1908＝22歳：「諸俳誌に盛んに投稿して、俳人として知られるようになり、琉球人固有の作品を生もうと、友人と俳句結社{カラス会}を結成、やがて、地元紙の俳壇の選者を務めるうち、
 韓国併合・・・1910＝24歳：「“沖縄学の父”と言われる伊波普猷を館長に沖縄県立図書館が開館、伊波と、その親友で官吏生活のかたわら琉球史を研究する真境名安興と親交し始め、“琉球学者の三羽鳥”と言われるような関係になっていく。
 大逆事件判決1911＝25歳：*一つ年上の縁戚で、沖縄的なものを尊重し文化面・学芸面が評判の{沖縄毎日新聞}の記者になっていた小橋川南村から、旧支配層が創刊した{琉球新報}と、鹿児島や大阪の寄留商人が創刊した{沖縄新聞}との三つ巴の激戦に勝ち抜くべく、白羽の矢を立てられて、入社するや、才能が一気に開花するが、

明治天皇没・1912＝26歳：
 大正政変・・・1913＝27歳：
 第一次大戦始1914＝28歳：_退社。{琉球新報}の編集長に招聘されるも、旧支配層を激しく批判して、
 21ヶ条要求・1915＝29歳：_退社。小橋川らと{沖縄朝日新聞}を創刊し、3年間活動するうち、
 民本主義・・・1916＝30歳：小橋川とともに、近世初期の沖縄の天才的画人自了について調査、
 ロシア革命・1917＝31歳：{沖縄新公論}に「画聖自了」を連載。10年前に三宅雪嶺が創刊した{日本及日本人}に、琉球の民俗に関する論考を発表し始め、常連寄稿者であった“知の巨人”南方熊楠から、博識ぶり以上に、その考証の緻密さが内地人を凌駕すると驚かれるほどで、
 本格政党内閣1918＝32歳：_熊楠が、4年前から、{太陽}誌上に連載していた「十二支考」の「馬に関する民俗と伝説」を読み、編集部を通じて、琉球のことを伝えたいとの書簡を送って文通が始まり、琉球王国の正史「球陽」について度々言及して、熊楠から尋ねられている。ほどなく文通は終わるが、熊楠との交流は忘れがたいものになった。

ベルリン条約・1919＝33歳：_ {沖縄時事新報}の発刊に参画し、
 大暴落・・・1920＝34歳：_改題された{沖縄タイムス}の主筆になると、
 原敬首相暗殺1921＝35歳：
 水平社結成・1922＝36歳：*紙上に、自了から始まる「琉球画人伝」を発表。これに衝撃を受けた香川出身で、のちに琉球王国の文化を記録したことが、敗戦後の沖縄復興に欠かせない存在になった鎌倉芳太郎が、自宅に来訪。読書三昧で、所狭しと本が積まれ、県立図書館にも通って、伊波、真境名と語り合うのを楽しみにしていたが、
 護憲三派圧勝1924＝38歳：_妻真松が病死、友人らが心配するほど気落ちし、13歳をかしらに4人の娘が遺され、途方に暮れるなか、伊波の上京にともなう図書館館長の後任になろうと、尚家と関係の深い比嘉朝健を伴って、かつて激しく対立した琉球最後の王の子尚順を訪ねると、尚順は流石に正客として遇してくれ歓待もされるも、朝健の言う通り政治的動きをしたこと、その直後には、小橋川を訪ねて借金を快諾されたことを恥じたのか、数日しても自宅に戻らず、警察に届け出たところ、那覇港内で、水死体で発見され、身元がわからず無縁墓地に埋葬されていたことが判明した。{沖縄タイムス}には、2週間にわたって追討文が掲載され、なかでも伊波普猷のものは痛切きわまるものであった。
 多くのペンネームを用いたが、麦門冬とは、漢方薬に使われる常緑多年草ジャノヒゲのこと。{沖縄タイムス}は、4年後には終刊になり、現在の同名紙は別のものである。弟安久は美術の分野で活躍していく。